年収	0.09434567	0.1707	0.01356181	0.8479
個人主義志向	-0.10140734	0.1256	-0.11311459	0.1031
脱伝統的家族観	-0.08037292	0.2222	-0.16208210	0.0185*
生活設計志向	-0.02202322	0.7317	-0.12425680	0.0705+
モデルの有意水準	F 値 = 4.033 0.0004**		F 値 = 2.679 0.0112**	
決定係数	0.1161 (0.0873)		0.0827 (0.0518)	

注）**は 1 %水準で有意、*は 5 %水準で有意、+は 10 %水準で有意

注）括弧内の数字は修正決定係数をあらわす

第三子出産については、第二子出産と同様に、「年齢」が高くなるにつれて男女共に産み控えようとする傾向がある。女性の場合にはこの他に有意な効果を持つ変数はみられず、女性にとっては年齢の効果が非常に大きいことが明らかとなった。

男性の場合には、第二子出産意欲についても見られたように、「何年後までに何をするというように、きちんと生活設計をたてて暮らしたい」という志向性が出産意欲に有意な効果を持つ。ただし、効果の方向は逆で、第二子についてはプラスの効果が見られたが、第三子についてはマイナスの効果であり、生活設計志向が高いほど第三子の出産意欲は低くなる。いずれにしても、男性は、自分が家庭の中において経済的役割を果たせなくなる前に子どもを育て終えたいという意識が出産の意志決定に関係していると考えられる。

また、「子どもは必ずしも必要ではない」という価値観を持つ男性は第一子出産と同様に第三子に対しても消極的である。

3.6. 分析結果のまとめ

以上の分析を通じて、出産の意志決定に関して次のような結論を導くことができるだろう。

第一に、第何子の出産であるか、によって「出産意欲」に影響を与える要因は異なる。つまり、出産意欲の促進・阻害要因をひとくくりにすることはできず、家族政策を展開する上で、第何子の出産であるのか、を区別して政策的対応を考える必要がある。

第二に、「出産意欲」に影響を及ぼしている要因は男女で異なり、「ジェンダーシステム」を反映した構造が確認された。「性別役割分業」に関わっては、女性の場合には、「第二子出産」において「有職」であることはマイナスの効果を持つが、男性の場合には妻が有職かどうかは無関係である。この結果は、育児の大半が女性によって担われており、また、働く女性にとって子育て環境が整備されていない現実を反映していると考えられる。これとは対照的に、男性が「第一子出産」を考える時には、「年収」が問題となっており、年収が低いことによって出産意欲が低下する。しかし女性にはこのような効果は見られない。また、男性は「生活設計志向」が「第二子出産」や「第三子出産」の意志決定に影響を及ぼしている。以上の分析結果を総合的に考えると、「子どもを生む」という選択においても、男女共に、「男性が外で働き、女性が家事や育児を担う」という「性別役割分業」を前提としていると言えるだろう。

「ジェンダーシステム」の規範的側面に関しては、「家族観」の多様化の効果が見られ

る。すなわち、「結婚をしても必ずしも子どもを持つ必要はない」という価値観を持つ男女で「第一子出産」を回避するという関係が見られ、また、女性については「個人の生活を重視する」志向が強いほど「第二子出産」に消極的になることが明らかとなった。

第三に、「晩婚化」との関連について考察すると、第二子、第三子の出産に関しては年齢が上がるほど男女共に出産意欲は有意に低くなることから、結婚を遅らせたカップルは、「子どもは持つが一人まで」という選択をする可能性が考えられる。また、女性については第一子の出産においても「年齢」の効果が見られ、女性の出産意志決定において年齢が重要な位置を占めることが確認された。

本稿では何番目の子どもの出産であるかを区別して分析しているため、各々の分析に利用できるサンプル数は少ないという制約はあるものの、これらの結果は、出産するか否かの選択に「ジェンダーシステム」の影響が色濃く反映されている現状の一端を示していると言えるだろう。

4. グループ・インタビュー調査の概要

3 節の分析から、既婚男女が「ジェンダーシステム」を前提として出産の意志決定をおこなっている様子が明らかになったが、これらの結果を踏まえ、「ジェンダーシステム」が及ぼす影響についてより詳細に調べるため、1999 年 3 月～ 4 月にかけてグループ・インタビューを実施した。以下では、それらの結果を用いて検討をおこなうが、それに先立ち、調査の概要について紹介する。

まず最初に、企画にあたっては、第何子の出産であるかによって規定要因が異なるという分析結果を踏まえて、(1)出産経験のない既婚女性と、(2)既に一人以上子どもを持つ既婚女性の二種類のグループに分け、「子どもを産む／産まない」という選択を規定する要因について検討するという方針を採用した。

(1)に関しては、「結婚しても必ずしも子どもを持つ必要はない」という脱伝統的価値観が女性の意志決定に影響を及ぼすという分析結果が得られているので、「価値観の多様化」を中心的テーマと位置づけ、「どのような結婚観・家族観を持っているのか」、「どのような人生プランを持っており、その中で「子ども」はどのような位置を占めているのか」、「子どもを産まないという選択をしたことにより何らかの社会的プレッシャーを感じているのか」という点を重点的にインタビューを実施した(インタビューの概要については図 1 を参照)。

図 1 既婚女性（出産未経験）のグループ・インタビューの概要

◆調査時点：1999 年 3 月
◆実施場所：東京
◆インタビュー対象者について
（年齢／出身地／同居家族／現職／結婚年数）
・A さん～ 36 歳／東京／夫／学生（アルバイトも）／結婚 11 年
・B さん～ 36 歳／東京／夫／パートで証券業務／結婚 8 年
・C さん～ 37 歳／東京／夫／非常勤講師／結婚 4 年
・D さん～ 35 歳／東京／夫／自営で WEB デザイン／結婚 3 年

・E さん～ 34 歳／東京／パートナー（事実婚）／地方公務員／結婚 4 年
◆主なインタビュー内容
・現段階で出産を経験していない理由
・子どものいないことで言われた経験
・「結婚観」や「子ども観」
・「子育て」に対するイメージ
・人生プラン e.g.)ライフコース観／就職意欲

(2) に関しては、子育て環境が首都圏とそれ以外で大きく異なることが指摘されており、実際に合計特殊出生率は首都圏で著しく低いことが知られている。そこで、合計特殊出生率の低い地域の代表として東京都、高い地域の代表として山形県（鶴岡市）を選び、両地域のグループ・インタビューの比較を通じて子育ての現状に迫りたい。

また、第二子を出産するか否かについては、「年齢」が高くなるほど、「職業」を持つ女性ほど出産意欲が低くなる傾向がみられること、同時に、「今後は自分一人で過ごす時間を増やしていきたい」という「個人主義的志向性」を持つことも出産意欲を低めるという分析結果が得られているので、「現実の子育て状況や預け先」、「子育て上の悩み」の他に、「価値観の多様化」、「職業と子育てに関するライフプラン」、「出産経験」などについても話をきき、これらの要因が追加出産するか否かの選択にどのような影響を及ぼしているのかを検討する（インタビューの概要については図 2、図 3、図 4 を参照）。

なお、いずれの調査についてもグループ・インタビューに先立ち、年齢や職業など現在の状況について調査票に記入してもらい、それを参考にしながら約 2 時間にわたってインタビューをおこなった。また、対象者を通じて、配偶者の価値観や出産・子育てへの関わり、配偶者の仕事状況、対象者の友人の状況などについても情報を得ることで、できるだけ総合的に対象者のそれぞれが置かれている状況を把握するように努めた。

図 2 既婚女性（出産経験あり）のグループ・インタビューの概要（東京）

■ 1. 東京第 1 回既婚女性（出産経験あり）のグループ・インタビュー
◆調査時点：1999 年 3 月
◆実施場所：東京
◆インタビュー対象者について
（年齢／子ども性別・年齢／同居家族／現職／結婚年数）
・F さん～ 33 歳／女 1 歳 6 ヶ月／夫と子ども／契約社員で事務（週 30 時間）／結婚 4 年
・G さん～ 33 歳／男 1 歳 6 ヶ月／夫と子ども／パートで体操教室講師（週 6 時間）／結婚 8 年
・H さん～ 33 歳／男 3 歳 3 ヶ月／夫と子ども／無職／結婚 5 年

・Iさん～31歳／女2歳5ヶ月／夫と子ども／無職／結婚4年

■2. 東京第2回既婚女性（出産経験あり）のグループ・インタビュー
◆調査時点：1999年3月
◆実施場所：東京
◆インタビュー対象者について
（年齢／子ども性別・年齢／同居家族／現職／結婚年数）
・Jさん～33歳／女1歳5ヶ月／夫と子ども／フルタイムで研究職（週40時間）／結婚6年
・Kさん～30歳／女1歳5ヶ月／夫と子ども／無職／結婚4年
・Lさん～31歳／女1歳4ヶ月／夫と子ども／無職（4月から建築士としてフルタイムで働き始める予定）／結婚2年
・Mさん～29歳／女1歳5ヶ月／夫と子ども／育児休業中（実父の印刷会社で事務職）／結婚5年
※子ども人数はすべて1人で、3年以内に出産経験のある既婚女性を対象とした

図3 既婚女性（出産経験あり）のグループ・インタビューの概要（山形）

◆調査時点：1999年4月
◆実施場所：山形県鶴岡市
◆インタビュー対象者について
（年齢／子ども性別・年齢／同居家族／現職／結婚年数）
・Nさん～22歳／男4ヶ月／夫、子ども、夫の父、祖母、夫の姉／無職／結婚1年
・Oさん～26歳／男3歳0ヶ月と男7ヶ月の2人／夫と子ども2人／無職／結婚4年
・Pさん～26歳／女9ヶ月（2人目を妊娠中）／夫と子ども／無職／結婚1年
・Qさん～29歳／男3歳2ヶ月と男1歳5ヶ月の2人／夫と子ども2人／結婚5年
・Rさん～26歳／女3歳5ヶ月／子ども（夫とは離婚）／パートタイムで保母補助（週15時間）／4年前に結婚し、現在は離婚している

図4 既婚女性（出産経験あり）のグループ・インタビューの主な内容（東京／山形）

・現実の子育て状況、預け先など
・子育て上の悩み
・追加出産の予定、それに関わる不安や悩みなど
・出産経験や、出産への配偶者の関わり

・子育て経験の位置づけ
・人生プラン e.g.)ライフコース観／就職意欲
・政府への要望

5.「子どもを産まないという選択」に関する既婚女性グループ・インタビュー

5.1.「子どもを産まない」という選択の背景

計量分析の結果、「結婚したからといって子どもは必ずしも必要ない」という価値観を持つ女性は第一子出産を控える傾向にあることが明らかになっているので、まず最初に、現在までのところ「子どもを産まない」という選択をしている背景について、価値観との関連があるのかどうかを中心に話してもらった。

A さんは高校生の頃から子どもは要らないと思っていて、それを実行している。B さんは結婚して 7 年になるが、当初は子どもは要らないと思っていたが、現在は迷っている。C さんは結婚して 4 年がたつが、不妊がちではあるものの、不妊治療を必死にやればできないわけではないが、そこまでする気はないという微妙な状態にあると話す。D さんは結婚してあっという間に 3 年がたち、今回のインタビューに参加するまでは子どもがいないということを特に深く考えたことがなかったという。E さんは事実婚を 4 年間続けているが、子どもはどちらかというと怖いと感じていて、自分はまだやりたいこともあるし、成長していくためにはお金も時間もかかるので子育てには手がまわらないだろうと感じている。

この中では、A さんと E さんは比較的明確に「子どもを産まない」という態度を決めているが、それ以外の人は様々な経過の中で現在のところ、産んでいない。B さんは、この点について、次のような分析をしている。「子どものいない人というのは、他の人から見ると、全然要らないわという人と、すごく欲しくて不妊治療しているのよという人に二極分化しているように見られているような気がするんですよ。私なんかはフワフワッときちゃったところはあるし、今もはっきり要らないとは思わないし、不妊治療ですごく痛い思いをしてまで欲しいとも思わない。だから、こういうふうにパッカリ 2 つに分けて考えられると、困ると思わないけれど、ちょっと嫌な感じを持っているんですよね。」

続けて D さんも、「私もその中間タイプというか。人から何でいないのとか言われると、すごく返事に困る。初めて会った人に結婚何年目と聞かれて、2、3 年が過ぎたかなと答えると、「子どもは？」って必ず聞かれるし、聞かれること自体が最近すごく嫌だなって思うところがある。「今はいないけど」とかって言葉を濁して。やっぱりどっちかに決めなくちゃいけないというようなみんなの見方があるみたいで。」と語っている。

5.2. 社会規範のプレッシャー

「結婚すれば子どもがいるのが当たり前」という社会規範の下で、配慮なく投げかけられる言葉に傷ついた経験を持つ人は少なくない。

子どもがいないために言われた体験について、C さんは、「内容としては人間は子どもを産んで育てて一人前よってはっきり言われたことが 2 回ぐらいあるかな。」、また、A さんは「子どものいない人って性格が偏っているというふうに思われがちなんですよね。た

ぶん、偏っているかもしれないんだけれど、それは子どもがいても同じだったと思うんですよ。子どもがいてもこの性格。子どもがいなかったからこうなっちゃったみたいに言われるのはすごく嫌だなと思う。違うんですよ。いたって同じなのに、いないからって言う。みんな理由づけしたがるじゃないですか。こんな性格だとか。それだけは嫌だなとか思って。それで悔しい思いをします。」と話している。

事実婚の E さんは、「結婚した途端に子どもはどうするのとかって言われちゃうんだろうなという気はしますよね。でも、日本てそういう幅がすごい狭いような気がするんですよ。家族の在り方というのが、親二人、子ども二人で、都会だったらマンションに住んで、子どもは保育園なり幼稚園なりに行ってみたいな。そういうステレオタイプ。」と感じている。

この規範は、逆に、「子どもを持つためには結婚しなければならない」という形でも作用している。この点について、E さんは、「友だちと話していると、旦那は要らないんだけれど子どもは欲しいなんていう人がたまにいるんですよ。でも、実際に本当に子どもを作ったら、仕事の面とか生活の面とか、いろんなことを考えたらとんでもないことになっちゃうから、実際は持たないし、持てない人が大半だと思うんだけれども。でももし、持っても大丈夫なような状況があれば、子どもだけでも欲しいという人は結構います。」という友人の存在を話している。

また、「ジェンダーシステム」に関連して、D さんは、「子どもの問題も、職業の問題とか、結婚の問題でも、女性って「どうするの？、どうするの？」って言われる。男性って何も考えずに会社員をやっていて、不況になって辞めろと言われたから転職したみたいないい加減な感じでも、別に人から後ろ指を指されずにやっている。すごく羨ましいなって思う。」と述べている。

5.3. 伝統的な「結婚観・子ども観」への疑問

「子どもは要らない」と考えている A さんと E さんに、それぞれの「結婚観」、「子ども観」について話を聞いた。

A さんには、4 歳の子どもを育てている一つ違いの妹がいる。近所に住んでいることもあり、保育園の送り迎えを手伝ったりなど、A さん自身も子育てに協力している。その経験を通して、「子ども自体がそんなにおもしろくないとは思わないけれども、夫婦二人の生活で何も悪くないのでこの生活を変えたくない」と考えている。6 節で紹介する母親インタビューの中でも、「仕事と夫婦二人の時間というのを優先させたいので、子どもは一生持たないという主義の夫婦がいて、既にその予定でマンションを購入しているから方向変更はしないだろう。」という友人の例が紹介されている。

E さんの場合は、「子どもはどちらかというと、ちょっと子どもは怖いなというふうに思っちゃうんですね。子どもを自分が持つということは想像できないんですけれども。そういう意味で子どもは嫌いですね。だから、皆さん、やっぱり心が優しいんだなとちょっと思うんですけれども。ただ、子どもって、自分の全てを食い尽くしてしまうエイリアンのような気がしてしまって、どうもちょっと。」

妊娠期間中に関して、A さんは、「自分とは別の人格である人が、10 ヶ月お腹の中にいるだけで、もうゾーッとする。本当に別の人という感じがするんですよ。」と話し、E さ

んも同様に、「別の生き物がお腹の中で着々と大きくなっていくのかと思うと、映画のエイリアンを思い出しちゃいますね」と感じている。

また、インタビューの途中でCさんは、自らの親子関係の在り方と照らし合わせて、「私は親との関係がとても悪くて、子どもが怖い、子どもは絶対に嫌いと感じています。自分の子どもという概念はなかったんですね。だから、他の人と違うなと思いながらこのインタビューに来たんですが、今こうやってお話をうかがっていて、同じような感情を持っている方がかなり多いですね。」と話した。

5.4. 「子育て」のイメージ

全般的に、子どものいない女性達の「子育て」のイメージは否定的であった。A さんは妹さんの子どもを身近で見ていて、「子育てとは子どもの時間にすべてをあわせなくてはいけないことだ」というイメージを持っている。

地方公務員をしている E さんは、「子育て」のイメージと、そこからすけてみえる「職場の論理」を次のように語る。「子どもを持って、それで働いている女の人って、みんな悲惨という感じはしますよね、どうしても。というのは、どんな学歴を持った女の人でも、結局母親役割に押し込まれちゃうというのがあって。東大出の女性がいて、おそらく能力もあるんだろうけど、それでも、子どもの方に逃げ込んでしまう部分もあって、絶対に仕事にエネルギーを割かなくなってくるというのがあるし。他方で、女性で子どもを持って産休を取って、例えば、それが 2 人とか 3 人とかになっていったら、絶対に出世しなくなるんですよ。子どもを持って、なおかつある程度の役職に就いている女性なんて見たことがない。だいたい役職に就いている女性は、子どもがいない人か、結婚していない人のどちらかですね。女性の側が疲れちゃって嫌になるという部分も大きいと思うけれど、でも、やっぱりそういう女性を評価していかないというのがすごく大きいですよね。要するに、仕事に滅私奉公してこないんだから、おまえは出世は諦めよな、みたいな暗黙の了解というのか、そういうところがすごく。私の職場なんかは、働いて子どもを持っているのは当たり前という状況の中で、逆にそういうのが見えてきているなという感じがしますよね。だから、本当にかわいそうですよね。」

C さんも、「結婚しても続ける、子どもができても続けるという先輩を見ていて、羨ましいと思ったことはないんです。何と悲惨な、かわいそうな先輩なんだろうって。例えば、保育園に走らなきゃとか、子どもが熱を出しているとか、困ってばっかりいる先を行く先輩を見て、私もあれに続かなきゃと思ったことは一度もない。ああはなりたくないっていうほうが絶対に大きかった。(略) ちょっと前に読んだ報告書か何かで、女性に仕事もさせてあげましょう、保育所もなるべく増やしてあげましょうというような話が書いてあったけれども、「じゃあ、何、全部女性がやるわけ」っていうふうに、あれはとってもずれてるなって思ったんです。正直なところ。」と感じている。

5.5. 人生プランにおける「子育て」の位置

E さんは、子育て期とキャリアの発展期が重なるジレンマについて、「少なくとも子どもが幼稚園、保育園に通っている間とか、小学校低学年ぐらいまでは、なんだかんだって、突然熱出したとかって呼び出されたりとかということで、結構、産んでから 6、7 年は何

となく子どもに拘束されている状態じゃないですか。例えば、間違って 2 人産んじゃったら 10 年近く拘束されちゃいますね。逆に、その年代にあたる 30 代くらいって仕事の面でもやりたいこととか、いろいろチャレンジできる年代なのに、そこにも割けなくなっちゃう。」と語る。

他方、A さんは「子育て」と「仕事」の両立が可能となれば女性達が子どもを産むようになるとは限らない可能性について、次のように指摘している。「保育園を充実すれば子どもは産まれると言われているけど、私、あれは絶対おかしいと思う。私の友だちでも、会社に残っていても道がないから結婚して子どもを産むっていう人が結構いたんですよ。でもプライドがあるから、会社が嫌になったから結婚しますと言えないんですよね。だから、結婚か出産をきっかけに辞める。でも、もうその前に会社に居場所がないんです。だから、保育園なんてつくったってしょうがないんですよね。そんなことまでやって働こうと思わないわけじゃないですか。」ここには、出産が女性にとってある種の口実として利用されている状況が示されている。

5.6.「標準的家族」の息苦しさ

日本の「ジェンダーシステム」が規範として掲げている家族の在り方に対して、D さんは、次のような疑問を投げかけている。「日本には、何か標準タイプというのがあって、旦那さんがお仕事をして、お母さんは幼稚園のバスにバイバイという感じで、それにちょっとでも外れると、標準から外れると排除するみたいな、そういうところがたぶんあるんですよ。」と語り、「子どもがいてもいなくても当たり前、というふうになってもらいたいなという気はします。それが当たり前になっちゃえば、逆に産んでしまうのかもしれないなという気はします。」と続けた。

C さんも、「産んでしまった後が怖いという気持ちがあって子どもをつくらない人も、手作りのお弁当を「やらないもーん」って軽く言い切って許されるような社会になれば、気軽に産めるようになるのではないのでしょうか。」と話している。

オランダで「ワークシェアリング」の実態を見てきた E さんは、「もっと自由にやりたい育て方で育てられる社会というのはできなのだろうか。」という気持ちでいるという。C さんも、「女性にしかできないことって妊娠と出産だけでしょ。それ以外の子育てと家事は男性と半々にしていいと思うんですよね。じゃあ、その分、働く方も、収入の方も女性に半分というふうにしても構わないというか、それが実現したら、すごく自然に気楽にみんな子どもを産むんじゃないかなという気がしています。」という意見を持っている。

「結婚すれば子どもを持つべきだ」、「子どもを育てるのは母親だ」というジェンダーに関わる規範がなくなることにより、女性も男性もより楽な気持ちで子どもを産めるようになる可能性が指摘されていると言えるだろう。

6.「子どもを産むという選択」に関する母親グループ・インタビュー

以下では、出産経験のある既婚女性を対象に実施した 3 回のグループ・インタビューに基づき、「子どもを産む」という選択に関わる諸要因について、内容別に検討していきたい。

6.1.「子育て」の地域差－「夫の子育て参加」と「実家の育児援助」について

東京と山形を比較すると、地域によって子育ての状況が大きく異なることが明らかになった。

6.1.1 東京の子育て

東京では、平日は夫の帰宅が遅いために、妻が職業を持つ場合でも妻一人で子育てにあたり、夫は時間がある休日に子育てに参加するというパターンが圧倒的に多かった。たとえば、J さんの夫は基本的には朝 7 時半に家を出て、夜中の 2 時、3 時に帰宅という生活を送っているため、J さん自身もフルタイムで仕事をしているが、頼みたいと思っても気の毒で頼めないという状況があるそうだ。子どもがひどい風邪をひいて 1 週間ぐらい家から出られなくなった時には、J さんは 3 日間の休暇、夫は半日の休暇を取り、残りの 2 日間は仙台にある実家から母親に新幹線で来てもらってしのいだという経験をしている。

全体的には、夫婦のどちらかの実家が近くにある場合にも、実家の両親に子どもの面倒をみてもらっている人は少なかった。両親がまだ仕事をしているために難しいというケースもあったが、親子関係の中に「子育てを手助けする」というパターンが組み込まれていないように思われる。専業主婦の K さんの場合、電車で 1 時間半のところに夫の実家があるが、遊びに行くことはあっても、預けに行ったり来て面倒をみてもらうということはなく、「近くに手を貸してもらえるような人がいないために、自分の体調が悪くなる時が一番怖くて、ちょっとでも頭が痛いと薬を飲んで、ちょっと鼻水が出てもすぐ薬を飲んだりというように、私の方がすごく気をつけるようになりました。私が倒れたらダメだという意識があるので、そういう癖がつきました。」と話している。3 歳の子どもがいる H さんも、「これから助かるのは、幼稚園に行くのは寂しいんですけれども、5 時とか 6 時まで預かってくれるんですね。別料金になるんですけれども。だから、基本的には頼みませんけれども、何かあった時には、こっちが具合が悪い時とかも頼めるので、それは少し助かったなと思っているんですけれど。」と感じている。また、4 月から建築士として復帰する予定（再就職）の L さんは、「保育園はまだ夕方まで預かってくれるって決まっているから楽ですけれど、小学校になった時、下校後をどうするかというのが、今から気になるんです。何曜日はどこのお稽古というふうに考えてやらなくちゃいけないのかなと思っています。」と語り、職業を持つ他の女性からもこの点について不安の声が寄せられた。

夫が子育てに参加するようになった時期としては、首がすわってある程度意志疎通ができるようになってからという家庭が多く、内容的には「お風呂に入れる」、「一緒に遊ぶ」、「ごはんを食べさせる」などが多い。出産して数ヶ月はほとんど寝ているか母乳を飲む程度であるために夫が参加しにくい側面もあるようだが、育児だけではなく、「家事」についても、ほとんどの家庭で妻が大部分をおこなっていた。家事がある程度できる夫は、この期間に家事を担当することによって妻の負担が軽減されているが、家事が苦手な夫の場合には、妻に家事負担が重くのしかかっていることも明らかになった。この点に関して、里帰り出産をしなかった I さんは、「退院してからも家事とかも全部一人でやった。夫は協力しようかなという気持ちにはなるんですけれども、実際にはあまり手が出なかった。頭にはくるんですけど。ただ、部屋の中が汚くても、ご飯を全部買ってきたものですませても、何も言わないタイプなので、結婚後太った夫のダイエットを兼ねて、出産後 3 ヶ

月ぐらいまでは彼の食事をつくらなかったので随分楽になったんです。」と、家事の省略化で対応したことを明らかにしている。

6.1.2 山形の子育て

東京では女性一人で子育てをしている現状があるのに対し、山形の場合には、全般的に夫は積極的に家事や育児に参加しており、また、実家の育児援助を頼ることができるという特徴がある。実際、東京ではグループインタビューの際に、企画者側でベビーシッター・サービスを用意して実施したが、山形ではこのサービスを希望する対象者がいなかった。対象者の多くはどちらかの実家に預けたり、母親に自宅まできてもらって面倒をみてもらっているとのことだった。

実家には母親の他にも祖父母など複数の人手があり、多くの女性は自分の実家だけではなく、夫の実家にも日常的に預けている。どちらかと言えば気兼ねなく預けることはできるのは自分の実家だが、夫の実家に連れていっても孫が可愛くて喜んでみてくれるから、というのがその理由であった。例えば、O さんは、「人間味があって温かい、家族でもめながらも家族になっていくというか、嫁ぎ先の方と本当に家族になっていくというか。そういう意味では大変だなということは、私も体験したし、聞いたりもしましたが、でもそれはそれでいいものだなと思っています」と話しており、「家族」の中に嫁ぎ先の家族も含めて考えていることがうかがえる。

夫の帰宅時間も東京ほど遅くなく、19:00 頃までには帰宅するという人が多い。そのことを反映してか、全般的に夫は家事や育児に対して積極的に関わっている。家事や育児を通じて夫とのコミュニケーションが活発な O さんは、今現在は二人の子どもを楽しみながら育てているそうだが、二人目を産んだ直後にそれまでに想像したこともないような精神的疲労感に襲われ、あわせて、将来の経済的負担も頭をよぎるようになり、精神的に追いつめられた状態になったが、夫との話し合いで乗り切ることができたと話している。

6.2. 「子育て」の悩み

このように東京と山形では、「子育て」における女性の負担が大きく異なっているが、この状況は子育ての中で感じる悩みの違いにも反映されている。

6.2.1. 「孤立感」との戦い

東京で実施した 2 回のグループ・インタビューでは、子育て中の悩みとして「孤立感」をあげる人が多かった。これは、実際に都会での子育てが女性一人でおこなわれている状況から生まれている。

秋に出産した K さんは、「育児をしていて「孤立感」というのを何となく感じました。時々ですが。割とまわりがまだ独身で仕事をしている人が多くて、子どもが小さいと友だちにも会いに行けないですよね。電話では話すけれど、なかなか仲のよい友だちにも会えなくて、ちょっと寂しいなと思う時もありました。子どもがお座りもできない 6 ヶ月ぐらいまでの小さい頃は外に出られないので、特に「閉鎖感」というのも感じました。雪が続いたり、雨が続いたりすると簡単に出られなくて。(略) 一人目だからのせいもあると思いますが。あと、私の性格もあると思いますけれど、ちょっと神経質ぎみになって、寝ていても生きているかなとか、そういうぐらい気になっちゃって。だから、寝ていても、

いつも神経を使っていて、それでよけい出られないと、孤立感を感じてしまって。春にならないと、子どもが風邪をひくのが怖くて出かけられなかった。」という経験をしている。

郊外に引っ越したばかりのＩさんも、「「孤立感」が一番問題だと思うんですよ。育児中、子どもがいて絶対に外に出られないから。預けようにも預けられるところがそう簡単にはないし、あっても高かったりする。ないことはないんですけど、3時間以上で8,000円なんて払えない。」と話し、インターネットで知り合った「ネット友だち」とのやりとりで「孤立感」を解消している一例を次のように紹介してくれた。「子どもがインフルエンザになった時に、病院で「インフルエンザＢ型です」って言われてもよくわからなかった。Ａ型はいっぱい載っているのに、Ｂ型ってほとんど載っていなくて、Ｂ型って何だろうって思って、メールで「Ｂ型って何ですか」と聞くと、誰かが教えてくれる。「頑張ってね」とか言われて、「はーい、頑張ります」なんて返事を出して。看病している横にパソコンでこういうメールのやりとりをウトウトしながらやっています。」と話す。

山形のグループ・インタビューでは「孤立感」を訴える人はいなかった。おそらく、実家との結びつきが強いために、生後6ヶ月ぐらいまでの外出が難しい時期にも「孤立感」を感じずに対処することができるのだろう。離婚を経験しているＲさんの場合も、既に実家の両親は亡くなっているが、叔母など他の親族からサポートを受けられる状況にある。

東京のグループ・インタビューで「孤立感」を訴えたＫさんは、「子育てについて具体的なことだけではなく（「昨日、何時間眠れたわ」など）、もうちょっと深いところで話し合えたり、特に悩み事があるというわけではないけれど本音で相談できたり話し合いができるという人が周りにいないので、そういう人が欲しいと思います。ずっと朝から晩まで子どもと二人でいると、ちょっとしたことでも、気になり始めると、「どうなるだろう、どうなんだろう、どうなんだろう」と考え込んでしまう。「大丈夫よ」ってもし、声をかけていただいたら、それだけでスッキリするということがよくあるので、欲しいですね、相談できる方が。」とも話している。他の女性についても、困った時に相談する相手は、電話で実家の母親かもしくは自分の姉などに限られている。

山形のグループ・インタビューに参加したＲさんの場合には、身近に気軽に相談できる人がいるおかげで「孤立感」を感じずに済む現状を次のように話している。「1、2年先に出産を経験した先輩お母さんというのが大事で、そういう人の話を聞く機会があるので、親戚に深刻な電話をしなくてすんでいます。今時のことを教えてくれるというのがありがたいです。お医者さんの言うことも時代と共に変わるし、オムツでも何でも変わっていくじゃないですか。そういう今時の情報を「こうだよ」って教えて下さる先輩お母さんはとてもありがたいです。」

東京のインタビューで唯一、実家（夫）が近くにあり、子どもの面倒をみてもらうことができるＦさんは、「私は（他の方と比べると）比較的楽な育児をしていて、いろいろな人の手を借りてやっているので、ストレスも全く感じることなくやっています。夫婦二人だけでやっていらっしゃる人と比べて考えると、いろいろな人の手を借りるというのがやっぱり一番なんだろうなというふうに思います。」と話している。

6.2.2 自分一人になる時間が欲しい

「子育て」を女性一人ですることにより、常に子どもと二人きりでいる状況が生まれて

しまう。東京でのインタビューでは「自分一人になる時間が欲しい」という悩みも寄せられた（6.6 も参照のこと）。

4 月から仕事に復帰する予定の L さんは、「ただ一人で抱っこ紐もなしで、一人でぼーっとしている時間が欲しい。そういう時間は 1 日のうちに 1 時間もなかったりしているのが今の状態。子どもが昼寝の時も結局家のことをやっていて、自分のことはしていない。そういう一人でいる時間がちょっととれると、自分の精神的なバランスを保つことができる。そういう時間がとれないと、怒りっぽくなっちゃったり。今は、昼間は娘の相手をして、旦那さんが帰ってきてからはその相手というように、常に人に対して何かしている状態。」と現状を話す。

子育て中の「孤立感」について話してくれた K さんは、インタビューの終盤で「既に、私、今がすごく楽しいんだけれど。こういう話ができるから。たぶん、今日は私、すごく娘に優しいと思う。」と話し、フルタイムで働く J さんも、「もし、こういう場じゃなく、今日、4 人が集まったら、子どもを連れていて落ち着いて話ができないから、結局、子ども同士を交流させて終わり。だから、友だちと会っていても常にそういう状態なんですよね。こういう意味では、子どもから物理的に離れている時間があるということが、少しでいいんですけれども、逆に子どもにとってもプラスになるんですよね。」と続けた。J さんは、「仕事を始めてから一人になる時間ができたので、気持ちの上ではすごく楽になりました。」とも話していた。現在、契約社員として働く F さんも、「数時間だけでも子どもとちょっとでも離れるということが結構息抜きになっていて、お迎えの時間なんかはとても劇的な感じで、帰ってからもものすごくかわいく思えて、働き始める前よりは精神的に子どもに対してはいいんじゃないかなという感じで今のところは毎日の生活をおくっています。」と話している。

山形のインタビューでは、夫の転勤が多い銀行員などの妻と交流のある R さんは、次のような話をしてくれた。「転勤族の方で営業だと夜遅くまで帰ってこないそうで、母子家庭と同じ状態だと言う。そのせりふの中には精神的葛藤が含まれているんですよね、私と話すときに。子どもを好き、嫌いとはまた別だと感じます。嫌いとかじゃないんですよ、我が子だから。でも、自分に対して自分の時間を使ってもいいよという時があってもいいじゃないか、というのが、私の友だち、私も含めて、そういう正直な気持ちですよね。自分一人でゆっくりとお茶を飲む時間が欲しいよねというのが正直言って、私の周りには多いんですが。（略）自分だって女性だよって、自分だって一人の人間なんだから、母だけれど人だよということが多いです。私の周りには。」

「一人になる時間」がとれれば、本を読んだり映画を鑑賞したり、友人と会ったりという「楽しみのための時間」と、将来のキャリアプランとの関係で、「自分のためになる勉強の時間」として使いたいという声が多かった。

6.2.3. 実家からの育児援助の悩み

山形でおこなったインタビューでは、全ての女性が実家から日常的に何らかの形で育児援助を受けていたが、そのことに伴う悩みも寄せられた。つい最近まで自分の実家で両親と同居していた P さんは現在、歩いて数分のところに引っ越したが、現在の心境を次のように語っている。「（見てくれる人がいていいなって言われるけれど、）実家から離れて

住んでほっとしているんです。見る人がいっぱいで、甲高い声が飛び交って、子どもよりそっちの方がうるさいというのが正直な話で。・・・子どもとの時間をゆっくり持てるし、ちょっとくらい散らかっても周りがギャーギャー言う人がいないから。お母さん達と一緒にいると、母親ってこうしなきゃいけないというふうなプレッシャーを感じて、お尻から煽られるような感じがする。」

6.3.「仕事」と「子育て」の両立

1年間の育児休業を経てもとの職場に復帰し、現在は契約社員として週に30時間働くFさんは(Fさん本人の希望で契約社員になったが、いつでも正社員に戻れることが可能。)、世田谷区の家庭福祉員の制度を利用している。夫の実家が自営業で夫もそこで働いているため、サラリーマン世帯に比べると時間の融通をつけやすく、夫も比較的育児に参加しているが、それでも、現在の悩みは「仕事に復帰しても満足な仕事ができない」という点にあるそうだ。「やっぱり、仕事に復帰しても満足な仕事ができないというのが常にイライラの原因になっています。子育てに復帰しても中途半端だなという気もするし、主婦としても中途半端な仕事しかできないし、仕事の場でも、しょっちゅう熱を出したとかいうふうなお迎えの話がありますから、どの役割においても自分は中途半端なような気がして、この点は非常に悩みます。」

フルタイムで働くJさんの会社は、企業の中ではかなり制度が進んでいる方で、企業内託児所保育所があり(通常は18:00、最長で19:00まで預かってもらえる)、育児休業も最長で2年近く取れるそうだ。Jさんの部署は全面的にフレックスタイムを採用しているため、月に150時間という勤務時間を満たせさえすれば時間の使い方は個人に任されている。また、上司に妊娠を報告した時にも、「いつ戻るの」と尋ねられ、復帰は当然だとみなす職場の雰囲気もある。しかし、「条件的には恵まれているものの、それでも会社に勤め続けるとなるとやっぱりかなり状況は苦しくて、2人目ができる時期によって、自分の仕事の調整も必要になってくるので、そこのところは、できてしまったらその時はキャリアの方を変えていくしかないかな、と思っています。具体的には、SOHOとして独立し、今の会社と契約して働くという方向を考えています。」と話している。

かつてJさんが0歳児保育について調べたところ、定員6人に待機児20人以上いるところもあり、子どもが産まれる前からの問い合わせが多いと言われたそうだ。また、「継続就業を望む女性の中には、妊娠の時期を4月から入れるように考えて計画出産する人もいるそうで、そうでもしないと普通の会社ではとても対応できないでしょう。でも、仕事とか勉強じゃないから計画どおりにはなかなかいかないですからね」という感想も述べている。

Jさんは日常生活について、平日夫がほとんど家にいないこともあるが、「自分のことについては、5分、10分のことすらできないんですよね。新聞を読むこともままならない日があったりして。毎日が戦争で、平日は特に。土日もそれに備えるという感じで。なるべく平日に負荷がかからないようにってやると、やっぱりどうしてもそれ以外の部分が、本当にぜい肉がそぎ落とされた生活というんですかね。そんな感じになっているのが自分でもちょっと寂しいですけれども。」という悩みを抱えている。

パートタイムで週6時間働くGさんは、求職活動の際に、小さい子どもがいるだけでは

なく、既に一人いることで、またもう一人子どもを産むだろうと警戒されて雇ってもらえなかったという経験をしている。G さんは出産前に J さんと同じ会社に勤めていたが、同期の同僚がたまたま同じ時期に何人も流産し、働き続けながら妊娠するリスクを目の当たりにして怖くなり、仕事にやりがいを感じてはいたものの、妊娠前に退職している。将来的にはフルタイムで仕事を持ちたいという希望を持っているが、(夫の帰宅が遅くほとんど一人で子育てをしているので) 自分一人で育児ができるという条件の下で、前の仕事と同じようにやりがいのあるおもしろい仕事が果たしてみつかるのだろうか、という悩みを抱えている。

独身の時からネット友だちを通じて「仕事と子育ての両立の大変さ」についての情報を得ていたIさんは、「そんな大変なこと、私にはできないわ」と思っていたと話している。

後述するように、インタビューの対象者は全員が追加出生を考えているが、K さんの友人の中には、仕事のために中絶を選んだ人もいる。老人ホームに勤めているその女性は自分が仕事で必要とされていると強く感じており、一人目の子どもを産んだ際に 1 年間休業し、その後に 2 人目を妊娠したが、既に仕事に復帰していたので、さんざん悩んだ結果、子どもを中絶するという選択をしたという。

ここで語られている事実は、「仕事と子育ての両立」は、けして出産後だけに生じる問題でないということだ。流産のリスクを避けて離職するということは、「子どもを産む」という決断が妊娠以前から始まっていることを意味しているし、現在のように子育てが女性一人に委ねられている状況では、妊娠後も出産と仕事とのトレードオフに悩まざるを得ない状況が続く。その選択肢の一つとして「中絶」もあるという重い現実がある。

6.4. 「子育て経験」について

子育て経験については、様々な評価があるようだ。出産前後の変化に関しては、F さんは「子どもを産む前までは非常に子どもが嫌いというか、核家族で育っていたので子どもに接することがそれまでなかった。子どもを産むことにとてもマイナスイメージを持っていたので、産むまでは、「本当に産んで、この子を可愛く思えるかしら」という不安がとてもあったんですけれど、実際に産んでみたらすごくかわいくて、こういう気持ちになるものかなというふうに思って、今は 3 人ぐらいは欲しいなというふうに考えています。」と話している。

しかし F さんとは対照的に、G さんは「私はあまり子どもは好きじゃなくて、産んでもやっぱりあまり好きじゃないというか。よく、子どもを見ていると時間を忘れるとかいう人がいるんですけれど、私とかは隙あらば何か他のことをしてやろうとか思って。あなたという命をあげたから、もう許してという気があるんですよね。私が子ども嫌いで「子どもは嫌い」と言ったら生まれなかったあなたなんだから、産んだだけでもよしと思えというのがどこかにある。でも、それでもやっぱり一人っ子はどうもというから、2 人とか 3 人は要るかなと思うんですけれど。」と感じている。

「子育て」のプロセスの中で、J さんは、「私の場合は、子どもがなかなかできなくて、それこそ青写真みたいなものを描いても無意味だというのをすごく感じていて、やっぱり子どもができてみて、生活が始まってみると、ほんとに物事って計画通りにいかないんですよね。毎日のことも、長いことも。それで、子どもがいない時だったら、ちょっと計画

が狂うとイライラしてしまっていたことが、子どもができてからだと、そんなにイライラしなくなったというか、そういう生き方もあるなとか、そういう暮らし方もあるなというふうに思って、じゃあ、その時にどうしようって、「状況対応型」というか、その時のベストで道を作っていくのも悪くはないかなという考え方に、私なんかは逆に変わった。」と話している。

6.5. もう一人子どもを産む？

6.5.1 「一人っ子」ではかわいそう

インタビューに参加した女性達は、離婚をしている R さんをのぞいて、二人目以降の出産を望んでいる。東京の場合、その理由は、世間一般が平均二人だからというある種のプレッシャーではなく、「家にいて子ども一人と大人一人で一緒に遊んでいても、やっぱり子ども同士で遊んでいた方が絶対楽しそうなんですよね。目の輝きが違っていて、本当に嬉しそうにしているから」、「将来的に自分が死んだ後のことを考えると、なんとなく一人きりで残されるよりも兄弟姉妹がいた方がいいかなという気もします。」というものであった。

ただし、対象者の友人の中には、「子どもがいなくて働いている人は、一人ぐらいは産んでみようかなと思うけれど、悩んでいる人は結構多い。」そうだ。

山形では、二人目以降の出産をごく自然なものとみなしており、当然自分も体験するものと考えている。

6.5.2 母親一人で対応できる？

しかし、東京のインタビューでは、二人目の出産を望みつつも、それに伴う通院、産褥期の家事や子どもの面倒について誰がするのか、などについて自分一人で対応できないのではないか、という不安が最も強いことが明らかになった。将来の教育費に関する経済的負担についても言及はされたが、6.5.3 で後述するように、山形では将来の教育費を中心とした経済的負担を訴える声が圧倒的に強いのとは対照的である。

まず最初に具体的にあげられたのは、一人目の子どもを抱えながら通院できるかどうか、という不安である。産婦人科で待つ時間が長く、2 時間とか 3 時間は当たり前で、途中で出産が入ると何時になるかわからないと言われた経験を持つ女性も多かった。

出産間隔が 2、3 年の場合には、子どものお昼寝時間を確保するためには病院に通う時間を考慮しなければならないだろうという不安も寄せられた。また、第一子が幼稚園に通う頃に妊娠の可能性が高い H さんの場合、子どもが夏休みの期間に出産できないかどうか、ということを考えてしまうそうだ。

第一子がいる場合には、産褥期にも子どもの面倒をみたり、子どものために家事をする必要がでてくるが、それを一人でできるのかという点にも不安が寄せられた。第一子の出産直後は家事の省略化で対応した I さんは、「友人をみていると出産後 3 ヶ月までがすごく大変みたいです。だから、よく、ベビーシッターで産褥シッターみたいのがありますよね。そういうのは絶対安くしたらガンガンお客さんが来ると思います。自分一人で、夜に 2 人の子どもをお風呂に入れるとか、想像できませんよね。」と話している。

6.5.3. 将来の教育費への不安

東京とは対照的に、山形の場合には、少なくとも夫婦のどちらか一方の実家が近くにあり、今後の出産においても親族ネットワークから育児支援を受けられる見込みが高いため、公的な育児サービスの提供については一定の意義を認めつつも、それよりはむしろ将来的の教育負担に関わる経済的支援を求める声が強かった。

既に二人の子どもを持つ Q さんは、3 人目の出産を望んでいるが、経済的負担が頭をよぎるという。「友だちと話すんですけれど、子どもを何人欲しいという話になって、いっぱい欲しいという人は多いんですけれど、やっぱり経済的なことを考えると、もう 2 人でいいという人も。希望としては、4 人とか 3 人とかいてもいいと考えても、経済的問題で迷うという方がやっぱり多くて。特に、私が働いていないので経済的な負担は大きいです。」

現在二人目を妊娠中の P さんも、「私も二人以上は欲しいと思うんですけれど、やっぱり同じように経済的に迷います。夫が自営業をやっているものだから不安定なんです。だから、お父さんに頑張ってもらわなくてはいけない。その問題さえクリアできればと思いますが、私よりも主人の負担の方が大きいものですから。夫とはそういうことについて話をしますが、あまりに私が言い過ぎちゃって、ちょっと逃げ腰になっていますけれども。でも、二人目もできたので、頑張ってもらわないといけないと思っています。」と話している。

このような発言には、ジェンダー意識の内面化が関係していると考えられる。山形のインタビューに参加した女性達の多くは、自分が仕事を持つことを「家計の補助」と位置づけていた。Q さんは、「働く必要がなければ家で主人の帰りを待ち、生き甲斐は仕事以外のことでみつけたいなと考えている。」と話し、同じく 2 人の子どもを持つ O さんも、「できれば、経済的なこととか全然考えなければ、本当に家の中のことだけをしっかりやりたいなという気持ちはあるんですけれど。やっぱり子どもにお金がかかるし、家も建てたいななんていう夢もありますし、経済的な面から考えて、自分に収入があったらなって考えると、小学校を出るまではやっぱり家にお母さんがいた方がいいかなと。」と考えている。

6.5.4. 二人目は仕事が軌道にのってから

専業主婦の場合には、あまり間隔をおかずにすぐに二人目の子どもを欲しいと考えている人が多かったが、既に仕事に復帰していたり、その予定が具体的に決まっている女性はある程度仕事が軌道に乗ってから、と考える傾向が強いようだ。4 月から復帰予定の L さんは、「私はようやく来月から子どもが保育園に入園し、やっと仕事を再開しますので、少し仕事が軌道に乗ってから、また考えようかなとも思っているんですけれども。すぐにというのは、ちょっと考えられないですね」と話している。同じく 4 月から復帰予定の M さんも、「私もそうですね。4 月からやっぱり保育園で、自分の仕事ができるので。子どもができちゃった時がちょうど一番仕事が楽しかった時だったんですよ。私の人生の中で一番きっと楽しい時にできちゃって。(略) だから、ギリギリまで働きましたし、戻れるのがすごくやっぱり嬉しいので。私も戻ってある程度仕事ができるようになってそこでまた赤ちゃんができちゃうとやめなくちゃいけないというのはちょっと避けたいので。しばらくは仕事をしてと考えています。」と考えている。

このように仕事を通じた自己実現志向の高い女性にとっては、「子育て」と「仕事」は

ある程度トレードオフ関係にあると位置づけられており、両立が困難な状況になれば、二人目の出産を望みつつも、実際には出産に至らないケースも出てくるように思われる。この点について L さんは、「母親も医師としてずっと働いていたこともあり、自分でも仕事をしていくというのは生き方として当たり前という考えを持っているが、母の場合にはおばあちゃんがいておばちゃんがいてという大きな家だったので、人手があったからこそできたこと。自分一人になってみると、これはどうやってやっていったらいいのだろうと思う時はある。」と話している。

6.5.5. 配偶者の態度

追加出生に関する夫の態度について聞いてみたところ、専業主婦であり、当面は職業を持つつもりのない K さんの場合には、「うちはあまり欲しくないような、でも欲しいような、まだ迷っているところですね。というのは、生命保険にずっと入っていなかったものですから、入る時に設計プランといってすごい数字のグラフがくるんですね。子どもを育てるのに、全部私学だと幾らになるとか。もしお医者さんになったらとか。コストを見せられた気がしたようで、「こんなにかかるんだよ」とか、「二人で楽しめなくなる」とか言っていました。「将来は海外に二人で住もう」とか、そういういろんなことを夢見ている人で、別に二人の生活もあるからというので、生まれたすぐの頃はそんなことを言っておりました。」と話している。

また、出産前には子どもをあまり欲しくなかったという F さんの場合、「主人がすごく欲しがって、「早く、早く、子どもが欲しい、欲しい」といったものですから、私は実際問題、最初は全然子どもが欲しくなかったんです。一人ぐらいは産んでみようかな、みたいな感じで産んでみて、子育て期間中を過ごしたわけですけれど。今、私は 2 人目、3 人目が欲しいなと思うけれど、逆に主人は、もう一人でたくさんという感じで。あんなに欲しがっていたくせにと私は思うんですけれど。思ったよりも時間が拘束されているんだろうと。休日の時間も拘束されているし、子どもがいればどこかに連れていかなければならない、遊びに連れていかなければならないとか。そういうのでやっぱり彼としても大変なのかなって思いますけれど。男性側も多少そういうのもあるかなって思いますけれど。」というように夫の態度が変化している。

K さんの夫の場合には、「稼ぎ手役割」を意識した発言であり、F さんの夫の場合は、他の家庭と比べると積極的に育児に参加しているという状況から、子育ての大変さを感じて態度が変化したと考えられる。

子どもを持たないという選択をした女性達のグループ・インタビューの中でも、夫の考え方について尋ねているが、パートで証券業務についている B さんは、「夫はすごく忙しくて、子供も作れないんじゃないかと思うんですけれど。本気で本人がそう言っていますから。今の働き方だと、たぶんそのうち死んじゃうんだろうなって。子どもが産まれても、学齢期で死なれたら本当に困ると思うので、そういう感じはします。」と現状を説明している。

6.5.6. 初産の経験

今回のインタビューでは初産の経験がどのようなものであったのか、についても詳細に尋ねているが、ここでは追加出生意欲との関係で話されたことについて限定して検討した

い。

インタビューに参加した対象者の中には、妊娠期間中ほとんどずっと「つわり」があったという女性もいたが、出産そのものは「安産」の範囲という人が多かった。しかし、周りの人の様子について聞いてみると、K さんの友人で切迫流産を経験した夫婦の場合には、夫も妻も一人で十分と考えている人が多いそうだ。K さんによると、「切迫流産か切迫早産かは時期によって流産か早産かという違いなんだけれど、そうなると、本当にもう寝たきり状態になっちゃって、入院するでもなく、自宅でとにかく静養して、ちょっとでも動くとやっぱり悪いということで、私の友人も何人かは同じ状態だったんですけれど、本当におうちのことは何もできない。やっぱりすごく神経を周りが使って、とにかく無理をさせないように、無理をさせないように。だから、ご主人の方が不便だと思う。」という状況になるという。

また、J さんは同じ職場の人の例を出して、次のような感想を寄せている。「出産がすごく大変で、出産前から妊娠中毒症のような症状がちょっとずつ出ていて、出産の時にすごい大出血をして、入院している期間、1 週間結局入院したんだけれども体調が戻らなかったんですね。彼女は「もう要らない」ってやっぱり言ってます。だから、やっぱり最初の出産というのはすごく大きいと思います、その後。」

6.6.「個」としての生き方

女性は性別役割分業から距離をおき始めており、妻や母親としての役割に縛られない結婚や家族の在り方を求める傾向が強まっている。このような伝統的価値観からの離脱は、出産の意志決定においてどのような影響を及ぼしているのだろうか。

計量分析の結果、第二子の出産を望むかどうかについては、女性についてのみ、「個人としての生活を充実させたい」と考えている人は出産を控えようとしていることが明らかになっている。この点に関して、東京で実施した 2 回のグループ・インタビューで尋ねたところ（6.2.2 も参照のこと）、結婚前に仕事と結婚や出産についてライフプランをはっきりと決めていた人はほとんどいなかったが、漠然と「自分固有の領域を持っていたい」という思いを抱いていた人が多いということが明らかになった。

現在、フルタイムの仕事を持つ J さんは、「一方でさらに子どもが欲しいという気持ちと、他方で、仕事は何らかの形で継続したいというふうに考えています。そこには、長い目で見て、常に自分の何かを持っているということを求めていくという気持ちがあります。」と話す。

契約社員として働く F さんの場合、夫の実家が自営業でありいずれ夫が経営者になった場合には F さん自身も家を空けることはできなくなる。その状況を予想しながら、「私は割と二人の人生設計は別物というふうに考えていて、結婚したら、もうそのまま別物でいいやなんて思っていたんですけれども、やっぱりそうじゃなかったんだなと。結婚したら、やっぱり違うもんだなって改めて感じているんですけれど。やっぱり 2 人で調整して妥協していくしかないのかなって、思うんですけれどもね、最近は。難しいですよね。」という感想を述べた上で、「私としては、収入の糧というのを自分で稼ぎたいという気持ちがあって、昔からそういう気持ちがあったので、仮に自営業者の妻というふうになったとしても、自分で収入を得るという道を模索して確保したいなというふうには思っています。

(略) まだ具体的にというのはないんですけれど、私はずっと経理の仕事をしていたので、主人の会社の経理をやるということもあるんですけれど、できれば会計事務所というふうに独立して、店舗のちょっと片隅でという感じの道にいきたいなというふうに思っています。」という考えを示している。

将来的にはフルタイムで仕事につくことを希望している G さんは、「私は、結婚のために転勤して、子どもを産むのに会社を辞めたんですけれど、その間、夫は何も変わっていないんですね。移動とかもなくて。(略) 私は自分の中で、結婚とか出産と、仕事というのは考えが結構大きくコロコロ変わってきて、私はそのたびに悩み、そのたびに実際、結構変えてきたのに、夫はずっと一緒なんですよ。ずっと夜の 11 時まで仕事をしているわけですよ。そうすると、何か納得がいかないというか、それはよく夫と話したことがあります。あなたはなぜ変わらないのかと。悩みもしないのかと。(略) 人生設計について、2 人でという感じがしないのは、何か割に合わない。ずっと最近割に合わないと思っているんですけれど。なぜ割に合わないと思っているかというと、やっぱり仕事をしたいのかなと。」という、「個」としての生き方に関わって切実な思いを語っている。

6.7. 政府への要望

東京では、孤立した子育ての状況を反映して、次のような制度の導入を希望する声が多い。

・地域の中に、短時間でも預かってくれて、安くて、安心して預けられる育児サービス。
ただし、子どもとの相性があるので、同じ地域に複数のサービス提供者がいて、その中から選択できるようにしてほしい。
・どこでどのようなサービスがあるのかわかりにくいので、広報活動を積極的にして欲しい。
・小学校入学以降の「学童期」に子どもを安心して預けることができる制度。
・子どもを連れていっても面倒をみてくれる美容院、病院、産婦人科など。

山形ではむしろ、将来の教育費の軽減を可能とするような継続的な経済援助を求める女性が多い。

7. 結論と今後の展望

計量分析によって示されたように、夫婦は「性別役割分業」を前提に「子どもを産む／産まない」という選択をおこなっている。男性は自らを「稼ぎ手」として、女性は「家事や育児の担い手」として位置づけ、その役割を果たせるか否かに基づいて、選択にあたっている。他方で、「ジェンダーシステム」を否定する方向に向かっている「結婚観・家族観」の多様化も、出産の意志決定に重要な影響を及ぼしている。

さらに、グループ・インタビューの結果は、女性達がおかれている状況は異なるものの、「ジェンダーシステム」が女性の「子どもを産む／産まない」という選択を、様々な形で規定していることを明らかにしている。

「子どもを産まない」という選択をしている女性達は、自らの価値観に基づいて産まないと決めている場合と、結婚後のプロセスの中で結果的に出産を経験していない場合の二

つに大別されるが、どの女性も「ジェンダーシステム」が期待する規範に対してある種の息苦しさを感じている。日本社会が暗黙のうちに仮定してきた「標準家族（夫婦と子ども二人）」のプレッシャーがなくなることが、気軽に子どもを持てる方向に作用するのではないのだろうか、と考えている女性が多い。

それに対し、既に出産を経験し、実際に子育てをしている女性達は、主に「夫が外で働き、女性が家の中で家事や育児をする」という「性別役割分業」に規定されることによる「生きにくさ」を感じている。

東京での 2 回にわたるインタビューは、夫の長時間労働という日本の企業システムを背景として、女性一人で子育てをしている現状を浮き彫りにしている。女性に子育ての負担が大きくのしかかっている現状は、「孤立感」をもたらし、「二人目を産みたいがどうやって一人で対処していけるのだろうか」という不安につながっている。また、「仕事と子育ての両立の困難さ」は、時には妊娠前の離職や中絶という事態を引き起こしている。

山形では夫が家事や育児に参加しやすい労働条件があり、また、実家が近くにあることで、女性は子育てに関わる孤立感や不安からは相対的に解放された状態にある。このような子育てのしやすさは、ごく自然に「もう一人子どもを産もう」という選択につながっているようである。しかし、彼女らには、「将来の子どもの教育費をどうやって負担できるのか」、という悩みがある。

インタビューに参加した人数は限られており、またそれぞれの人が必ずしも全体を代表しうるサンプルであるということは保証されていない。したがって、限られた範囲での考察ではあるが、東京と山形では、「子育て環境」の違いがあるだけではなく、「ジェンダーシステム」が仮定する規範に対しても、女性達は異なった態度を有しているように思われる。東京の女性も、性別役割分業に対して明確に否定的な態度は示していないものの、家族とは異なる領域で「個」を確立したいという気持ちが強い。しかし、山形の女性は既存の性別役割分業をごく自然なものとみなしており、自分のしたいことを家庭外でみつけたいという意識はそれほど見られない。

このような価値観の違いは、「子育て」に関わる悩みにも反映されていると考えられる。東京の女性達は性別役割分業の中で自分一人で子育てを担う辛さを様々な形で感じていると同時に、「子育て」と「（家庭外での）自己実現」との間に葛藤も感じている。現在のところ、多くの人にとっては、それが二人目の出産を控えようとするまでには至っていないが、参加者のまわりには「一人産んだからもう十分」と考える人も少なからずいる。

対照的に、山形の女性達は働くことをあくまでも家計の補助とみなしており、夫の所得で十分であるならば家事や育児に専念したいという考え方が強い。そのために、東京の女性が抱えているような心理的葛藤に悩むことは少ないものの、「稼ぎ手」として夫一人を想定しているために、将来の教育負担に経済的に耐えられるかどうか、が出産をするか否かの選択に大きな影響を及ぼしている。

このように、日本の「ジェンダーシステム」は様々な形で、「夫婦が子どもを持つ／持たない」という選択に影響を及ぼしている。男性の場合には「経済責任」、女性の場合には「家庭責任」が大きくのしかかっており、出生率の低下をくいとめようとするならば、「男女共同参画社会」の実現が不可欠であることを示唆している。

最後に、有効な政策的対応について考えてみたい。まず、都市部とそれ以外では「子育